

～～肺がんについて：まず最初に～～

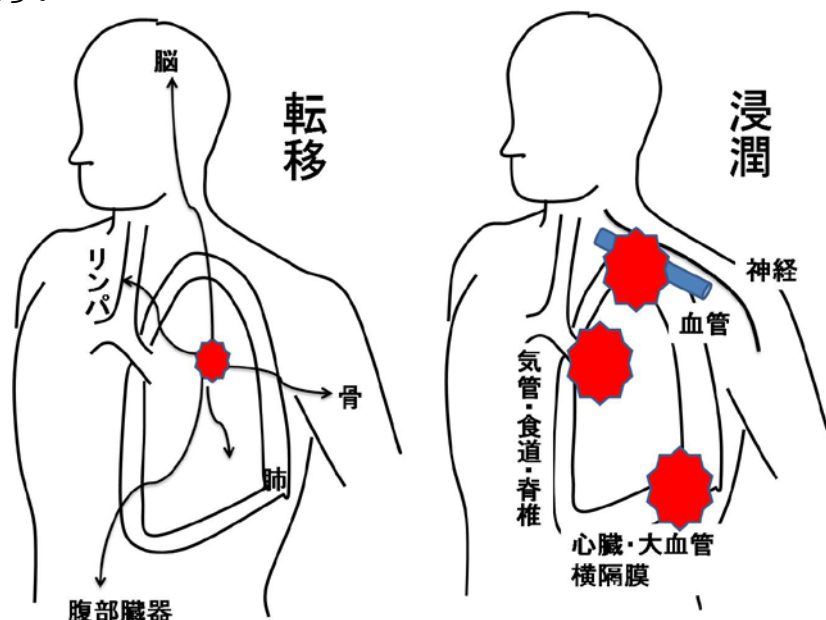
●**癌（がん）**とは・・・正常な細胞が突然変異をきたしたものです。

異常な増殖をおこし、周囲へ**浸潤**（破壊していくこと）・**転移**（血液やリンパの流れによって広がること）、**再発**（治療後に再び病変があらわれること）をおこし、無治療であれば人を死に至らしめます。

*癌以外にも浸潤・転移をおこす細胞もあります（リンパ腫・肉腫など）。総称して悪性腫瘍と呼びます。

●**肺がん**とは・・・肺の細胞組織が癌化したものです。肺がんはとくに浸潤・転移・再発が多いがんです。

*他の癌、たとえば大腸癌や子宮癌などから肺に転移したものは肺がんとはいいません。肺転移といいます。



転移：転移する場所によって症状は様々です。脳転移ではけいれんや麻痺など、骨転移では痛みを生じます。症状が無い転移もあります。

浸潤：周囲へ破壊性に進行した状態です。場所によって症状はさまざまです。

●**肺がんの種類**・・大きく、4種類にわけます。(実際はもっと細かく分類されています)

* せんがん**腺癌**・・頻度が多く、初期であれば治癒度が高い肺がんです。

* へんぺいじょうひがん**扁平上皮癌**・・喫煙者に多い肺がんです。周囲臓器へ浸潤することがあります。

* だいさいぼうがん**大細胞癌**・・喫煙者に多い肺がんです。腺癌・扁平上皮癌よりやや転移再発が多い傾向にあります。

* しょうさいぼうがん**小細胞癌**・・喫煙者に多く、速やかに転移浸潤をおこしたり、内科疾患を引き起こしたり悪性度の高い肺がんです。初期に対しては手術を行います。が、化学治療が必要になることが多いがんです。

●**肺がんの病期 (ステージ)**・・大きく4期に分かれます

I期・II期～浸潤や転移が無い、もしくは軽度であり多くは手術適応となります。

III期～癌病巣から離れたリンパ節への転移や周囲臓器への強い浸潤が認められるものです。手術・抗がん剤・放射線治療を組み合わせた治療が必要になります。手術が困難なこともあります。

IV期～遠くの臓器(ほかの肺、脳、髄膜、骨、副腎、肝臓、腸管、など)に転移が認められる場合です。まず手術以外の治療(抗がん剤・放射線治療)を適応します。

* 肺がんの程度は、①肺がんの種類②肺がんの広がり(ステージ、転移や浸潤の有無・その場所や症状)などで決まります。

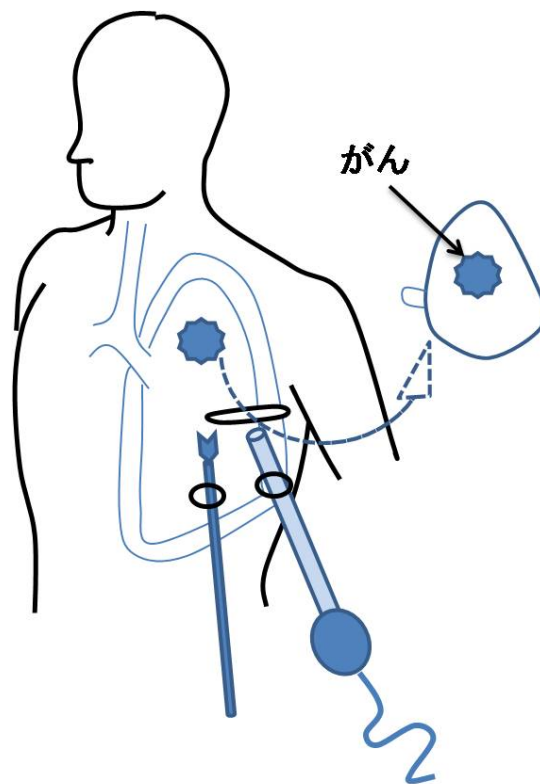
* 手術をした場合は術後に確定診断(病理診断)を行います。よって、病期が変わる場合があります。

～～肺がんの治療方法～～

●手術・抗がん剤（＝化学治療）・放射線治療が3本柱となります。
この三つを組み合わせる治療することがあります（集学的治療^{しゅうがくてき}）。

～手術～

肺がんに対する最も効果的な局所治療（部分的な治療）です。肺がんが切除可能な範囲かどうかと、全身麻酔・手術が出来るかどうかのからだの機能評価（心肺機能^{きのうひょうか しんぱいきのう}など）とが重要です。当科では内視鏡^{ないしきょう}（胸腔鏡^{きょうくうきょう}）を使った体にストレスの少ない手術を行っています。

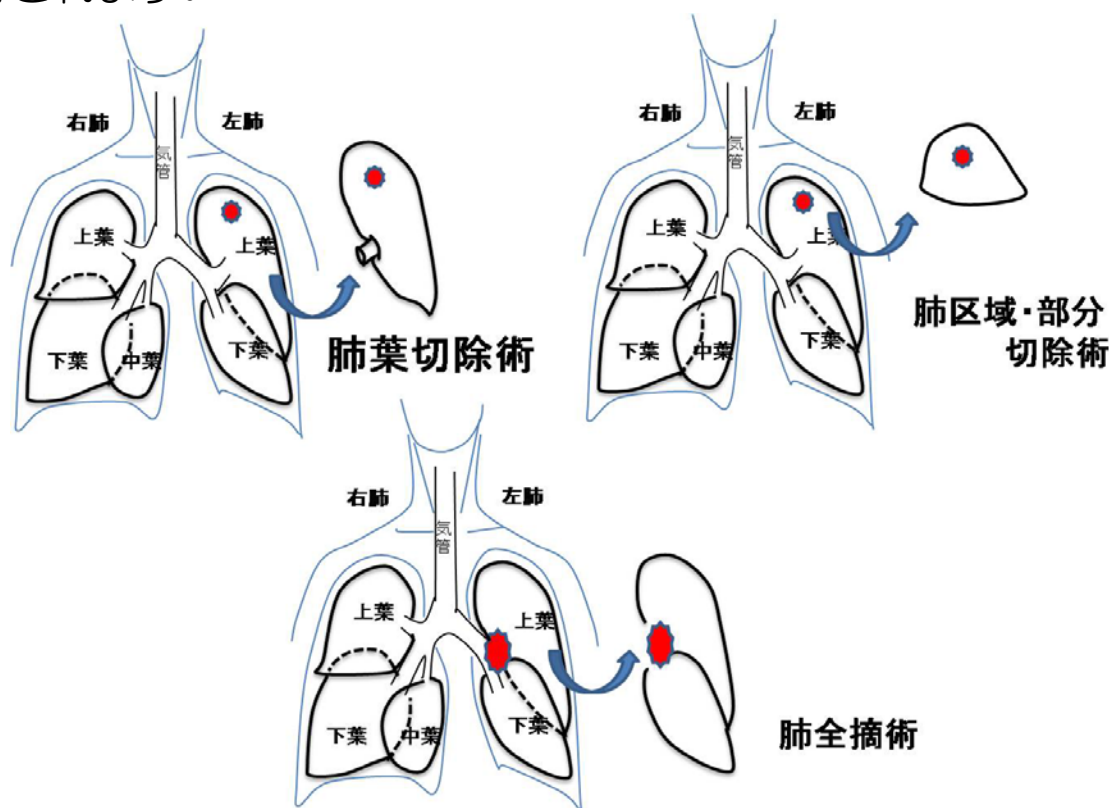


胸腔鏡(カメラ)による手術

■さまざまな手術方法■

はいようせつじょ ひようじゅんじゅつしき
肺葉切除が標準術式です。

がんが大きい、根本に存在する、などの場合、最大で片方の肺を切除する肺全摘が適応されます。がんの大きさや、患者さんの状態・リスク（危険度）によっては縮小手術として区域・部分切除が適応されます。



* 肺は右は上中下の三つ、左は上下の二つに分かれており、各々を肺葉とい
います。

* リスクがなければ肺周囲のリンパ節も切除（郭清といひます）し、診断に
役立てます。浸潤がある場合、浸潤臓器を合併切除する（拡大手術）こと
もあります（胸壁や心膜、神経や血管など）。

* 禁煙は手術の絶対条件です。

* 手術について詳しくはべつに説明いたします。

～抗がん剤（化学治療）～

肺がんに対する全身治療です。がんが既に広がっている、あるいは広がりつつある、小細胞がん、などでは抗がん剤治療が適応されます。

様々な種類があり、点滴で入院して行うものから外来での飲み薬まであります。第一選択としては点滴による強い抗がん剤を用いますが、効果に乏しい・副作用が強いなどの場合は種類や量を変えていきます。

手術の前後で抗がん剤治療をお勧めする場合があります。

* 治療は呼吸器の内科にて行います。詳しくは内科の先生からお話があります。

主な副作用：吐き気・食欲低下・下痢・便秘などの消化器症状が主ですが、ほかに手足のしびれ・痛みなどの神経症状、内臓障害（腎不全・肝不全など）、特殊な肺炎（間質性肺炎）免疫能力が落ちる（骨髄抑制）、など多彩です。

～放射線治療～

肺がんに対する局所治療です。リスクが高く（心筋梗塞・重度の糖尿病・呼吸障害など重篤な基礎疾患がある）手術ができない場合や、脳転移がある場合などに選択されます。

副作用として、正常な肺組織へも悪影響があることがあります（放射線肺臓炎）。

* **脳転移**が認められた場合、放射線治療や手術（脳外科）が適応されることもあります。**全脳照射**や**定位放射線治療**（ガンマナイフ）などがあります。

たいしょうちりょう ～～対症治療～～

●患者さんからみた治療の選択

肺がんの治療（手術・抗がん剤・放射線）は治療が大変なだけでなく合併症や強い副作用があり、患者さんの状態によっては行うことが困難なときがあります。また、患者さん自身が肺がんの治療を望まないこともあります。

肺がんの治療を行わない場合、がんの進行に伴う症状があらわれます。それらの症状を抑える治療を対症治療たいしょうちりょうといいます。

～対症治療の例～

●疼痛対策：

消炎鎮痛剤・非麻薬性鎮痛剤～座薬や飲み薬で痛みを抑えます。消化器への副作用が出るときがあります。（胃炎・胃潰瘍など）。

麻薬性鎮痛剤～その種類は様々ですが、消炎鎮痛剤で痛みが引かないときは仕様をためらいません。モルヒネは一般に言われているよりも副作用が少ない理想的な薬です。副作用として吐き気、強い便秘やふらつきなどが見られることがあります。

●呼吸困難感：

気管支拡張剤や鎮咳薬など一般の呼吸疾患薬から、呼吸困難に対してモルヒネや抗不安剤、ステロイド薬などは効果的です。酸素が取り入れられないときは在宅酸素療法（HOT ホット）を行います。

●その他：進行肺がんの症状は実に様々です。ケースバイケースで対応する必要があります。

～肺がんになったとき大事なこと～

●まず大事なことは肺がんについて、肺がんの治療方針についてをよく知ることが一番大事です。自分で調べることも大事ですが、インターネットなどでは間違っただ情報もあります。

肺がんにもいろいろな種類があり、程度・状態も患者さんによって実に様々です。主治医になった専門医によく話しを聞きましょう。

●「まな板の鯉」という意識では治療はうまく進みません。「治すんだ！」という熱意が良い結果に結びつきます。

●ご家族の協力は必要です。検査や治療には相当のストレスと時間がかかります。ご家族も同じように肺がんへの理解を深めて、バックアップしてあげてください。

●当院の医療スタッフ（医師・看護師・介護士など）は患者さんの味方です。一人で考えず、スタッフにまず相談してみてください。

新潟厚生連 長岡中央総合病院
呼吸器外科

作成 古屋敷 剛、須田 一晴